乗り鉄探偵南　達仁短編俊作集　　高原列車殺人事件

新庄雄太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学芸会のため、３連休に高原列車に乗りに長野へ、小梅線に乗った穂乃果とことりと達仁は秋の信州秋の観光へ行った、ところが小諸駅で殺人事件が起きた、その列車のトリックとは　他の短編も投稿しますので、どうぞご期待

目次

高原列車殺人事件 ―― 1
悪夢を運ぶ特急「谷川1号」 ―― 8
L特急しらさぎ殺人事件 ―― 14
振り子電車殺人事件 ―― 20
殺意の根室本線 ―― 25

高原列車殺人事件

達仁とことりと穂乃果は、山行きに出かけ信州へやってきた。
「ふーん、空気がとってもおいしいね。」
穂乃果は言う。
「今日は行楽日和だね、穂乃果ちゃん」
ことりが言った。
「ことり、穂乃果、もうすぐ列車が来るぞ。」
達仁は、ホームで穂乃果たちを呼んだ。
達仁達は、朝1番の電車で、小淵沢から小海線に乗って、長野県の小諸へ向かう。
まもなく、2両編成のキハ58系の普通列車がホームに入ってきた。
「おーっ、キハ58系だ、」
達仁はすごく興奮しました。
「あのーっ、この列車小諸に行きますか。」
ことりは、助役さんに聞いた。
「ええっ、小諸行きますよ。」

「どうもありがとうございました。」
ことり達が乗った小梅線は右手に、雄大な八ヶ岳連邦を見ながら、走る。
赤岳以下、横岳、権現岳、網笠山等２０００メートルクラスの山が、夏でも、雪を頂いて、眼の前につらなるのだ。
小淵沢から四つ目の野辺山は、ペンションの多いところで、シーズンには、観光客で賑やかになる。
達仁達は、ちょうど１０月に学芸会の振り替え休日から「体育の日」まで8日、9日、１０日が高校の3連休になる。達仁と穂乃果とことりにはまたとない旅行のチャンスだった。達仁と穂乃果とことりは名曲「高原列車は行く」を歌った。そして穂乃果たちは笑った、ことりは達仁と穂乃果にチョコレートを分けてもらった。
穂乃果と達仁とことりが乗った小梅線は北へと向かっている、鉄橋を渡って千曲川を通って、小海、臼田、佐久、
小諸などの町や市がひらけています。
「恐れ入ります、乗車券を拝見させていただきます。」とそこへ車掌さんがやって来た。
「はいっ、切符。」とことりは乗車券を車掌さんに渡した。
あっとゆう間に小諸に着いた。
「本日は、小梅線をご利用いただきありがとうございました、間もなく終点小諸に到着し

ます、上野、直江津方面は信越本線でお乗り換え下さい。」と駅の放送が流れた。
　ことりと達仁はあの２人の男に、何かに気付いた。
「あれっ、さっきの人は清里駅に乗った人だよね。」
「さぁ、俺は気づかなかったな」
　とその時、穂乃果の悲鳴が聞こえた。
「キャーッ！。」
　ことりと達仁は列車に戻って見ると、それは男性の死体だった　達仁はことりに鉄道公安官と駅員を呼びに行った。
「どこだ、死体が見つかったのは」
「５分前に着いた、小梅線の車内に。」
「死んでいるのは、男性のようです」
　ことりは公安官と駅員をつれてやって来た。
　達仁は現場を見た、穂乃果はびっりしてことりに抱きついた。
「あなたがこの死体の発見者ですね。」
「はいっ」と達仁は答える。
「あなたの名前は。」
「南　達仁です。」

「えっ、南　達仁だって、南　達仁って確か」
「あの有名な、高校生探偵か」
「私、長野公安室の青山　肇であります」
「私も同じく、公安班長の倉本です」
「捜査主任の榊です。南探偵のご公明はかねがね、捜査協力に感謝いたします。」
「いえいえ、それほどでも。」と達仁はそこで照れる。
　現場には、すでに長野県警捜査一課と鑑識も駆けつけてきた、捜査は開始されてたいた。
「どうも、あなたが高校生探偵の南　達仁さんですね、長野県警の林です。」
「ところで、死因は。」
　達仁は、捜査主任の榊公安官に聞いた。
「詳しくは、解剖待ちですが、おそらくアジ化ナトリウムか青酸系の毒入りのコーヒーを飲んで、
　倒れた、うーむ、遺書も見当たらないな、となると。」
　達仁は、
「これは自殺でも事故ではない、他殺、殺人事件ということです。」
　榊主任は

「問題は、動機か。」
　青山公安官は、被害者の身元が割れたと榊主任に伝えた。
「主任、被害者の身元が割れました、害者は二宮和彦さん、２６歳です」
「そうか、では遺体を解剖に回せ、林刑事と青山公安官は列車に乗った人に聞き込みを」
「了解、」
　榊主任は、第二発見者の高坂穂乃果に事情聴取した。
「すると、あなたは小諸まで、乗っていたというのですね。」
「そうよ、私とことりちゃんと達仁くんといっしょに乗っていました。」
　榊主任は、穂乃果の証言で、林刑事に伝えた。
「なるほど、すると君は死体を見つけ、犯人は見てないんだね。」
　林刑事は、穂乃果に聞いた。
「犯人は、見たかどうかはわからなかった。」
　倉本班長は、１人の女性客の証言は。
「さぁね、あっ犯人は見ましたよ、２０代か３０から４０代ぐらい、」
「そうですか、どうもありがとうございました。」
　青山公安官は、４０代の男性乗客にアリバイを聞いた。
「私は、黒木隆弘です、私は昨日小淵沢から野辺山まで乗り、その後に野辺山から小諸ま

で乗りました。」
「どうして、野辺山からですか。」
「私は昨日、野辺山のＳＬホテルで１泊して、次の列車で小諸へ行きました。」
　達仁はことりに時刻表を借りた。
「ことりちゃん、時刻表見せて。」
「はいっ、時刻表、何かわかったのね。」
　達仁は、時刻表を見た。
「そうか、わかったぞ、犯人は途中下車したんだ、なるほどそれで利用したのか、犯人は乙女から小諸へ行ったんだ、そうか、わかったぞ、黒木が列車を降りたトリックが。」
　達仁はことりと穂乃果に犯人が分かったと知らせた。
「えっ、犯人が分かった。」
「それ、本当なの。」
「犯人は、その黒木って人ね。」
「あぁっ、Ｌ特急あさまや白山がだめなら、黒木は長野から、急行「信州１号」に乗って小諸へ降りたんだ。」
　黒木は、穂乃果とことりと達仁を脅した。
「あぁ、その通りさ、さすがだよ高校生探偵、二宮を殺したのはこの私だ、私はサッカー

部の八百長したの見られ、青酸カリ入りのコーヒーで口封じこんで、やっだんだ」
達仁は、体当たりし、穂乃果とことりは青山を制圧させた。
そこへ、林刑事と青山公安官と倉本公安班長が駆けつけ、黒木は逮捕された。
「黒木隆弘、二宮和彦殺害容疑で逮捕する。」
「あなたは、シロートにしては中々いい観をしてるようだな、よしっ、行くぞっ」
榊主任が達仁達に会った
「南　達仁、あなたのおかげで事件が解決しました、感謝します。」
こうして、1つの事件は解決した、俺と穂乃果とことりにとっては、苦い連休になった
乗り鉄しながら旅行するのは楽しいなと、でも、3人で行けば寂しくならない、俺が乗り鉄したら又事件を解決するのだ
（終）

悪夢を運ぶ特急「谷川1号」

達仁は、上野駅から上越線経由のL特急谷川1号に乗って、越後湯沢へ向かった。
上野駅のホームでは、上越線に乗るバックバンカーや観光客や登山客にスキー客でいっぱいです。
そこへ、２人の登山客に出会った。
「あなたも、谷川に乗るんですか。」
「はいっ、私は越後湯沢に行くんですよ。」
「私は、星野雄三です。」
「私、南　達仁です、音ノ木坂学院の高校1年ですが、４月から2年生になります。」
「私は、城島俊彦と言います、以後お見知りおきを。」
「こちらこそ、よろしく。」
「達仁ーッ、待ってよ。」
そこへ穂乃果とことりがやって来た。
「もう、先に行ったと思ったよ。」
「穂乃果、ことり、発車するのはまだ早いですよ。」

「そうだね。」
「そうね。」
「さあ、早く乗ろう。」
駅のアナウンスが流れた。
「まもなく、１５番乗り場にＬ特急・白根と谷川両１号がまもなく発車します、」
発車ベルが鳴った。
特急・谷川１号は上野を９時０４分に発車し、大宮、熊谷、高崎を通って、そこから上越線に入り、新前橋で白根１号を切り離し、水上を１１時２１分に停車し、終着の越後湯沢には、１１時４９分に着く、
「越後湯沢ーっ、越後湯沢ーっ、終着越後湯沢です。」
「春の越後湯沢は、楽しいな。」
「特急谷川はね、去年の１１月に上越新幹線と同時に運転開始されたんだって、以前はＬ特急とき号って列車があったんだけど、ダイヤ改正で廃止されたんだ。」
「そうなんだ、ときから谷川にバトンタッチだね。」
達仁と穂乃果とことりは湯沢スキー場にやって来た、俺達は楽しく滑っていた。
「写真撮るぞ、穂乃果、ことり。」
「達仁も早く。」

カシャッとカメラで収めた。
そして、俺は一番楽しみがある、それは湯沢温泉だ、俺達は、湯沢温泉で１番泊まってた。
「ふーっ、いい湯だったわ、穂乃果ちゃん。」
ことりが風呂から戻ってきたら、達仁と穂乃果はＴＶを見ていた。
「次のニュースです、今日午前１０時ごろ新潟市の明和銀行新潟支店で二人組みの男が現金輸送車を襲撃し３億円を奪って逃走しました、犯人は拳銃で警備員を射殺し、駆けつけた警官を負傷させ県警では２人の行方を追っています。」
「達仁、そういえば今日、私、その１人に会ったよ。」
「えっ、どこで。」
「私が、駅でその人とぶつかって、トランクを渡したの。」
「本当か、」
達仁と穂乃果とことりは旅館の人に頼み、警察を呼んだ。
まもなく新潟県警の渡辺警部が来た。
「新潟県警の渡辺です、犯人を見たって言う女性は。」
「多分、ことりって言う女の子だよ。」
「あなたは、」

「俺は、南　達仁だ。」
「おーっ、あの有名な乗り鉄探偵か。」
「ええっ、おそらく犯人は越後湯沢にいる可能性もあります。」
次の日、達仁と穂乃果とことりは四十八滝にやって来た、俺達は春の新緑を楽しんだ。
「写真撮るぞ、穂乃果、ことり。」
「達仁も早く。」
カシャッとカメラで収めた。
さらに、大源太でそば内体験もしました。
越後湯沢を回っているとことりは、犯人のバックを拾って、近くの別荘に届けた。
「おじさん、忘れ物を届けにきました。」
「ありがとう、親切に届けてくれて、お礼しなくちゃ。」
「お礼は、いりませんよ。」
「遠慮するな、君のおかげで大金を無さずにすんだんだから。」
「大金!。」
穂乃果と達仁はことりが遅いので心配していた。
そして、俺達は湯沢付近で現金輸送車襲撃犯の車を見つけた。
「そうか、わかったぞ新潟から上越線に乗って、越後湯沢の別荘で逃げ隠れし、別の車で

逃走したんだ。」
　と２人の男がやって来た。
「その通りだよ、探偵さん」
　とことりを人質になる。
「キャッ。」
「はっ、ことりちゃん。」
「こいつがどうなってもいいのか。」
「てめーっ、このヤロウッ。」
　達仁は、男に体当たりした。
　男は１発発砲し、男は滑って階段から落ちた。
「のわーっ。」
「こいつ、俺の兄貴を。」
　穂乃果と達仁はもう１人の男にパンチを食らった。
「よっしゃーっ。」
　こうして２人は新潟県警に逮捕され、３億円強奪事件は解決した。
　ことりちゃんも救出され、俺達はお手柄になった。
　そして渡辺警部は穂乃果とことりと達仁を見送りに来た。

「高校生探偵の南　達仁さんのおかげで事件が解決しました、感謝します。」
「いえいえ、俺達は乗り鉄しながら事件を解決したんだからな。」
「うん。」
帰りは特急・谷川８号で上野へ帰っていった、渡辺警部に別れを告げ、越後湯沢を後にした。
そう、それが乗り鉄探偵南　達仁は旅行しながら事件を解決していくのだ。
（終）

L特急しらさぎ殺人事件

達仁は、今年から高校2年生になった。
クラスは穂乃果とことりと同じ、俺の担任は初の女性教師です、名前は山本　小百合教諭。1年のときは土井先生だったが、土井先生は高校3年の担当になりました。
そして、俺に新しい友達が増えた、彼女の名前は園田　海未、穂乃果とことりの幼馴染で小学校のときから、仲が良かった。
「今日から、みなさんは2年生です、この度、皆さんの担任をすることになりました、山本小百合です、初めて会う日といると思うけど、1年の時の生徒はあまり変わらないけどね。」
みんなは、くすくす笑ってた。
「でも、少しだけ悲しいお知らせがあります、骨川君が富山の学校へ転校しました、父親の会社が不祥事で倒産し、向こうへ引っ越すことになりました。」
新学期の日、スネ夫が富山へ転校したと発表があり、生徒達を驚かせ。
スネ夫が好きだった穂乃果と穂乃果の友達は、殆ど泣いていた。
「あっ、あのさ、泣きたい時は泣いていいと思うぞ、もう泣き虫なんて言わないよ。」

そう言うと、ことりは達仁に泣きつき、すごく泣いていました。
帰りに、図書館に行って調べることにしました。
達仁は、スネ夫が乗った列車はL特急しらさぎに乗って富山へ行ったと断定した。
「しらさぎって言うことは、名古屋から富山・金沢を結ぶL特急である、ほぉっ、食堂車もあるのか、そうか、北陸本線か」
4月になりました、富山へ単身赴任の父から春便りが届きました。
「魚津の蜃気楼が見えるから、達仁も友達と連れてこられ。」
と書いてありました、達仁は穂乃果とことりを連れて富山へ旅立った。
達仁は、東京駅から0系新幹線ひかり号で京都へ向かい、京都から北陸本線経由のL特急「雷鳥」に乗って富山へ向かった。
「ことりちゃんと達仁君と一緒に旅行するのは越後湯沢依頼だね。」
「うん、私、前から北陸本線の特急列車に乗ってみたいと思ってたの。」
「あーっ腹減ったな、食堂車でも行くか。」
「そうね。」
「食堂車で食事はロマンチックだな。」
穂乃果達は琵琶湖を眺めながら昼食を済ませた。
「とやまーっとやまーっ終点富山です。」

穂乃果達が乗った雷鳥は富山駅に着いた、そこから直江津行の４７５系普通列車に乗り魚津へ向かった。
富山県の魚津では、春になると蜃気楼が見ごろの季節です、
ことりと穂乃果と達仁と父・裕行は魚津の海を見ながら、蜃気楼を楽しんでました。
「キャーッ、」
とその時、若いカップルの悲鳴がした。
「はぁっ、骨川君。」
なんと、スネ夫が魚津の海で遺体で発見された。
まもなく、富山県警捜査一課と魚津署のパトカーが到着。
「富山県警の熊田です。」
「ええっ、蜃気楼見ていたら、突然悲鳴が聞こえまして、それを見たら人が死んでいたんです。」
「あなたは、」
「俺は、南　達仁です。」
「南、あっあの高校生探偵の。」
「たぶん、絞殺したと思われます。」
「警部、遺体から列車の乗車券が。」

「えっ、L特急しらさぎ3号か、食堂車のレシート。」
「スネ夫は名古屋か米原でしらさぎに乗ったんだ。」
「しらさぎって名古屋まで走る特急でしょ。」
「そうだよ、北陸本線経由で走るL特急だよ。」

「犯人は、どうやってスネ夫を殺害したのか、よしっ、ことり、時刻表を貸して。」
「えーとっ、しらさぎは、米原経由だから、新幹線を連絡してるから、他は米原発の加越の可能性が高いな、
　雷鳥は湖西線経由だから、乗るとしたら、富山駅から乗るとしたら、北越と考えられる、それなら魚津に止まるはずだ。」
「ねぇねぇ、この列車じゃない。」
「そうか、富山から特急・北越か直江津行きの普通列車に乗り魚津で下車し、魚津港でスネ夫を殺害した。」
「犯人はあいつだ、この2人だ。」
　翌日、俺は犯人を追い詰めた。
「よしっ、うまく言ったか。」
「ああ、あいつが骨川の息子だからな。」

「そうか、よくやった　骨川の会社は俺のものだからな。」
「そこまでだ。」
「相談役、すぐ逃げてください。」
「あなたが、骨川スネ夫を殺害した犯人だな、村上清、そして武田信夫。」
「なぜ、わかったんだ、私の計画が。」
「私は、骨川の借金取りを雇って、息子を殺せと命令したんだ。」
「な、何だ、何なんだお前は。」
「南　達仁、探偵だ。」
「同じく、高坂　穂乃果。」
「あああっ、あはっ。」
「相談役の増田の指示で、骨川の会社を潰せと頼まれたんだ。」
その後、富山県警の熊田警部と警官を連れて、村上と武田は逮捕された。
3日後、殺人教唆と収賄の容疑で増田相談役が逮捕された。
ことりは富山湾を眺めながら、スネ夫を捧ぐ。
「骨川君、どうして、死んだの。」
ことりは、魚津の海を見ながら、スネ夫の思い出を振り返った。
達仁と穂乃果は、ことりを慰め、心に残る思い出に変わった。

（終）

振り子電車殺人事件

南紀白浜は、東の熱海や、九州の別府と共に、日本を代表する温泉地である。
温泉のほかに、海水浴場や、ゴルフコース等もあり、四季を通じて、観光客が絶えない

今日、達仁は、穂乃果とことりとにこと花陽を誘い、白浜へやって来た。
実は、にこが商店街の福引で1等を引き当て、南紀白浜の旅行を引き当てたのだ。
東京から0系新幹線に乗り、新大阪に止まりそして天王寺から紀勢本線に乗ります。
天王寺から紀勢本線経由のL特急くろしお、またこの列車を振り子電車と呼ばれ、にこのお気に入りの特急列車です。
「みんな、感謝してよ、この黄金の右腕に。」
「へぇー、本当に天才なんだねにこは、福引にかけちゃ。」
「本当は男子禁制なのに、達仁君は乗り鉄オタクなんだから。」
「にこちゃん、この振り子電車好きなの。」
「うん、大好き、前に希と乗ったのよ。」
「へぇーっ、希とね。」

でも、私はこの電車は私は大好き、まるでジェットコースターに乗っているみたいで爽快な気分です

ところが、その振り子電車が、恐ろしい殺人事件の舞台になるなんて、この時達仁達は思ってもいませんでした

「あらっ、あなた達も白浜へ行くんですか。」

「そうですよ、であなた達は。」

「私、戸山香澄よろしくね達仁君。」

「あっ、よろしくね香澄ちゃん。」

「同じく香澄ちゃんの友達の牛込りみです。」

「よっ、よろしくお願いします。」

「ちょっと、誰なのよ、香澄とりみって。」

にこは、達仁に怒った。

「にこちゃん、そう怒るなよ、旅は道連れルものさ、」

「そうね、」

３８１系くろしお　車内（普通車）

達仁は、穂乃果とことりと花陽とトランプでババ抜きをしていた。

にこは、香澄とりみと白浜の観光ガイドを見ていた。

まもなく、白浜駅に着いたくろしお、達仁達は白浜海岸へ行くためここで下車
今日は、海水浴開き、海に入ったり、ビーチボールもしました。
その時、くろしおに乗っていた、中年の男が苦しそうにしていた。
「うっ、ううううがーっ。」
「大丈夫ですか、しっかりしてください。」
「くっくく、下りの、下りのグリーン車の男に、」
「下りが、どうしたんですか?え?」
男は、その場て倒れた。
まもなく、和歌山県警のパトカーが到着した。
「被害者は、北岡物産の営業部係長、野沢啓介さん４６歳か。」
「殺人ですかね。」
「よしっ、周辺の聞き込みをしてくれ、後不審者はいなかったかのも頼む。」
「了解」
「渡辺警部、害者はこのカプセルを飲んでいたそうです、調べた結果、水銀系の農薬だと判明しました。」
「そうか、発見者は。」
「こちらです。」

「どうも、和歌山県警捜査一課の渡辺です。」
「白浜署の室沢です、あなたは、」
「私は、南　達仁です。」
「南、あっ、あの高校生探偵の。」
「死因は、毒物死ですか。」
「ええっ、その可能性もあります。」
「警部さん、ボストンバックの中にこんな物が。」
「これは、旅行雑誌に時刻表、これだけかな。」
「達仁、大変なことになったね。」
「ああっ、犯人は下りのグリーン車に男が乗っていたと。」
「俺たちは、白浜で降りたから、くろしお８号だから、白浜着は１２時０４分だ。」
「その犯人は、くろしお７号で引き返すことができるんじゃない。」
「そうか、上り列車を使ったんだ、犯人は会社の内部にいるんだ、きっと次の日に現れるんだ。」
「そうだ、達仁君、私ね犯人を見たような気がする。」
「えっ、香澄ちゃんそれ本当、どこで、」
「うん、私がお手洗いに行ったときに、すれ違ったの。」

達仁は、渡辺警部に連絡し、達仁と香澄の証言で犯人が割れた。
白浜海岸に来ると、犯人らしきに会うことに。
「あなたが、犯人だったな、くろしお8号から7号に引き換え乗車をしたってことだ。」
「誰だ、お前は。」
「南　達仁、探偵さ。」
「探偵。」
「社長の指示で奴を殺せと命じた、その列車トリックを見破るなんて。」
犯人の名前は、牧村誠二　北岡物産の社員で、裏金汚職によって野沢さんを毒殺したと自供した。
達仁とにこと香澄にとって、スリルなサスペンスの旅行だった。
三日後、収賄と殺人教唆で関社長が逮捕された、その後、北岡物産は東京地検特捜部に強制捜査された。野沢啓介の急死についても追及され、新聞は書き立てた。

殺意の根室本線

俺と穂乃果とことりは、上野駅に来ていた。
「うわーっ、夜の上野駅は、夜行に乗る人が多いんだね。」
「うん、私たちは、どの夜行列車に乗ればいいのかな。」
「あ、俺と穂乃果達が乗るのは常磐線経由のゆうづるだよ」
そう、実は達仁達は夏休みに北海道へ旅行をしていた。日程は1日目は函館、二日目は釧路と根室へ行くのだ
最初は、北海道の玄関、函館へ旅立った。
達仁達が乗ったゆうづる1号は、北の終着駅、青森へ目指した。
「じゃあ、私は寝るね。」
「じゃあ、おやすみ、ことり、穂乃果。」
「おやすみ。」
そして、八戸で新しい朝がきました。
「ふぁーっ、よく寝た。」
「おはよう、達仁君にことりちゃん。」

と目をこすり穂乃果。
「もう、朝。」
とことりは言う。
「もうすぐ、青森だぞ、速く支度しろよ。」
まもなく、ゆうづる1号は青森に5時03分に着いた。
「あっ、船だ。」
達仁達は、青函連絡船に乗り、函館へ向かった。
3時間で青森から函館へはるばると来たと感じた達仁と穂乃果とことり。
「はーるばる、来たぜ函館へーっ。」と3人は歌う。
函館
「函館といえば、五稜郭にハリストス教会に八幡坂。」
「着てよかったよ、北海道へ。」
「後、朝市に函館港も見に行こうぜ。」
「わおっ。」
といいながら、函館市内を回った。
次の日、達仁と穂乃果とことりは、函館駅にやって来た。
「うわーっ、列車がいっぱい。」

「でしょ、函館駅は北斗や北海、江刺・松前線、網走へ行くおおとり、釧路へ行くおおぞらもここが始発駅さ。」
「それで、達仁君、どの特急に乗るの。」
「これだよ、釧路行特急おおぞら3号さ。」
「これで、釧路へ行くのね。」
「そうさ。」
達仁達は、ディーゼル特急・おおぞら3号に乗った。
特急おおぞらは、北海道で最初に走った特急列車である。
愛称は、北海道らしく雄大なものをということで、「おおぞら」と名付けられました。
おおぞらはのヘッドマークには、北海道のシンボルである丹頂鶴が、２羽が描かれている。
おおぞらが走る路線は札幌から釧路間と函館から釧路間を石勝線経由で走っています
達仁と穂乃果とことりが乗ったのは、函館から釧路間を1往復で走る、特急おおぞら3号である。
特急おおぞら3号の時刻は。
函館　　９：４０　発

長万部　11：12
洞爺　11：42
東室蘭　12：13
登別　12：27
苫小牧　12：56
千歳空港　13：16
札幌　13：56
千歳空港　14：30
追分　14：48
新夕張　15：12
占冠　15：40
石勝高原　16：00
新得　16：28
帯広　17：07
池田　17：29
釧路　19：15　着

で約4時間59分の旅である。

特急おおぞら3号の車内
「はいっ、お菓子分けてあげる。」
「ありがとう、ことりちゃん。」
「ことり、俺にもくれる。」
「うん。」
と笑顔で笑う。
特急おおぞら3号は石勝線川端～滝ノ上間の鉄橋を渡る。
終着釧路１９：１５に着いた。
次の日、達仁達は釧路湿原観光だ
「ついに来たんだね、釧路湿原公園。」
「眺めもいいね。」
「じゃあ、写真撮るぞ。」
パシャッ!と記念撮影
「次は根室へ行くぞ、そこにはね鯨が出るらしいよ。」
「本当、」
「よーしっ、根室へ行くよ。」
「おーっ。」

達仁と穂乃果達は、釧路から普通列車に乗った。
１０時ごろに根室に着いた、
納沙布岬に来た達仁達は、海の潮風の香りが漂っています。
「オホーツクの海は、冬になると流氷が見れるのに、夏はこんな感じかな。」
「穂乃果ちゃん、夏は海のままだよ。」
「えへっ、そっか。」
「ねぇ、根室港でなんか浮いてるよ。」
「はあっ、人が死んでるよ。」
「キャーッ！」
と穂乃果とことりは悲鳴を上げた。
「被害者は、東京在住の梶原ひろしさん４５歳、職業はどこかの調査員見たいですな」
「うーむ、事故死ですかね。」
「いやっ、これは事故ではありません。」
「あなたは。」
「音ノ木坂学院の南　達仁です。」
「おーっ、あなたが高校生探偵の、釧路署の川井です。」
「北海道警の橘です。」

「誰かが殴って、突き落としたんでしょ。」
「川井刑事、犯人はその調査員が何かを調査して、口封じで殺されたと考えられます。」
「えっ、本当か、その線で捜査しましょう。」
　納沙布岬
「ここが、納沙布岬か。」
「見て、歯舞島が見えるよ。」
「本当だ。」
　その夜、犯人の影を見た。
「あんたが、梶原調査員を殺害したの犯人はあんただな。」
「なぜ、わかったんだ、って、誰だお前は。」
「南　達仁、探偵だ。」
「ににっ、探偵だと。」
　達仁は、犯人と格闘
「おりゃっ。」
「ぐはっ。」
「俺は、乗り鉄すると事件が起きるぜ。」
　その後、道警の橘警部と釧路署の川井刑事が駆けつけ、犯人は逮捕された。